あさ 4

2014

遠きミャンマー

日出づるパゴダが次のパゴダ呼ぶ

佐藤喜孝

あと

四　月

杭

佐藤喜孝
東京

雙六の途中はたのし上りけり

正月の顔に木綿の白くぐり

杭を出て杭に戻りし冬の影

花子は象千の言葉で雪に立つ

つるつるつるつる冬のオリンピック

春が來たきた金平糖をふたつ播く

化石の木化石の水に春近む

俳句を続けてゐる内にいつしかさまざまな言葉を覚える。外つ国のことは知らぬが、日本語の語彙の豊富なこと、奥深さに驚かされる。鳥獣虫草などの呼名となると底知れない。言葉を覚えはじめのあかごは回りの物へ勝手に名前を付けてゆく。ipad を二歳の孫は「ガオ」と名付けてわが家では公認された。結婚したふたりの言葉の整理も一苦労。妻が使ってゐた言葉をわたしも使ってゐることに気づき驚いたこともある。ある日妻が「トーミギ」と云った。失礼だがそのときは笑ってしまった。「モロコシ」「トーキビ」は知ってゐたが「トーミギ」は幼児語のやうな不思議なひびき。平凡社の大辞典にはしっかりと新潟の方言とあった。

なつかしい思ひ出である。

春浅し

定梶じよう
石川

寒暁の貨車入れかへの汽笛かも
鉛筆の芯のＢ４冬深く
雪おろしたる青空の重量感
何買はう立春大吉花屋混み
建国日さうかお金がもうないか
寂しいといへばさうかも雪解して
しわくたの千円札で春浅き

〈上がる〃有頂天外凧澄んで〉を所属していた俳誌に投句。誌の評者が「辞書に有頂天の言葉もある、しかし有頂天外はない。作者の造語であろうか」としてある。知識をひけらかそうとこの言葉を遣ったわけではない。当時常用していた大辞林の中からみつけだしたものなのだ。ん？

手持の広辞苑にあたったが第二版なので古い。で、図書館で確認したところ、新版の辞苑にも「有頂天外」の言葉は確かにない。

かつてある句会で、大冊の辞苑を毎回持参してくる猛者がいたけれど、広辞苑神話はむかしもあったし現在はもっと大仰になっている。「あなたの辞書にあっても広辞苑にその言葉はありません」とのりたもう方があるのだ。

☆

須賀敏子
埼玉

思はざる力仕事や春の雪
春の雪折られし枝のいたましく
かまくらの最後の最後融けてゆく
真鶴の干潮海苔を掻いてみる
蝋梅や胡桃のパンの焼きあがり
スケートの五輪中継午前四時
跳ぶ浅田真央金柑の甘く煮え

昨年十一月、理和さんがお兄さん二人を相次いで送られた頃、私も札幌に住む兄を癌で亡くしました。

七十九才でした。若くして両親を失い、苦学して高校の教師となった。母の実家で育てられていた私を引き取り、高校の三年間面倒を見てくれた。私は高校を卒業と同時に上京したので、それ以来共に暮らすことはなかった。還暦をとうに過ぎた私達妹は、いつでも会えば「お兄ちゃん」と呼んでいた。

もう繋がって来ることのない電話を眺めては、時々、「お兄ちゃん」と呟いている。

☆

竹内弘子
埼玉

帰り来て己れに塩を振る二月
真黒い猫が走れり薄氷
百合鴎わかくて気性あらげなる
きさらぎの青菜を卵とぢにする
春愁やスウプに余る鶏の骨
笑ひ合ふ鶯餅の青きなこ
墨東にあそびしことの桜鍋

雪降る

田中藤穂
東京

御近所のみんな親切雪の朝
春雪を乗せて傘ゆく駅の道
厚揚げに舌焼く夕べ雪が降る
家の前また過ぎてゆく雪女
べと雪に戸惑ってゐる雪女
木の枝で両手小さな雪だるま
足止むる駅中花屋ミモザの黄

福寿草

随分前にお正月の寄植の福寿草を庭に下ろして、それから毎年そこで花を開いていた。だんだん増えて喜んでいたらだんだん減って、今年はとうとう絶えてしまったと思っていたら、先日黄色い花が一つ咲いているのを見つけた。「あら、生きていたのね」と喜んでいたら、あとから又二つ花が咲いて三つになった。

福寿草の黄色は本当に濁りがなくて明るくていい。先日の大雪で何日か雪に埋れていたが、溶けたら又ぱっと明るい色に花を咲かせている。掘り出して鉢にでも植替えてあげようか。でも麝香草の中ではあるが矢張り大地に根を張っている方がいいかな。福寿草から少し生命力を貰ったような気がして嬉しい。

梅の花

長崎桂子
三重

日脚伸ぶアルバム整理笑と惜
気温の差鬱うつとして春炬燵
前後回転もある春吹雪
春の雪屋根からどどん解け落ちる
熊笹に子豚に似たる残り雪
行交ひの声の上擦る梅の花
嬌声にシャッターの音梅の花

平成二十六年は立春寒波が来て一向に寒さは和らぐ事はなく、むしろ一月末よりも朝の冷え込みがきつい日が続いている。強風と僅かだが雪掻き等体力を必要とする日常生活は足腰の疲労が最高になった。

そんな時三・四日昼間も薄暗い、翌日にガラス窓を通して日差しがいっぱいの春がやってきた。部屋は明るく気温も上げてくれました「ほつと」して豊かな気持になりとても幸せな一時で心より太陽さんに感謝。でも今年はまだまだ寒波がやって来るとの気象予報です。

雪

早崎泰江
埼玉

雪しんしん為すこともなく眺めをり
雪の中鵜の声透き通る
無残にも屋根打ちくだく春の雪
雪掻きや老いに鞭打つ道つくり
買物はパンと決めたり雪の道
山茶花の散り所なき銀世界
ここですと突如知らせるクロッカス

茶柱

森　理和
東京

桃色の冬に仙人掌花六つ
飼ひ兎終生前歯修整す
寒ざくら渚に二人逃げる追ふ
土手浅く寄り添ひをりしつくしんぼ
心中に見えぬささくれ鬼やらひ
寒紅梅あなたに逢へるけふららら
茶柱や障子に立木の影移る

☆

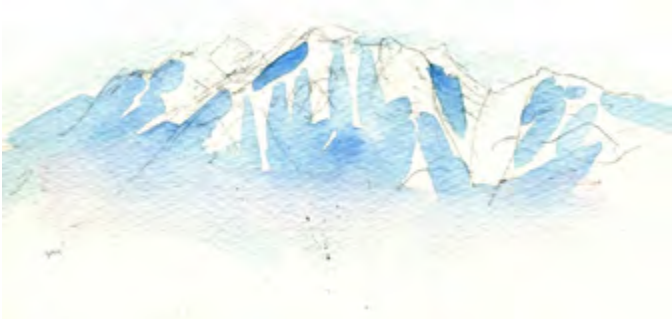
山荘　慶子
埼玉

如月や励ましくるる友の居て
遅き春独語のふえてきたりけり
対岸にクレーン動きて春浅し
果実酒をグラスに注ぐ春炬燵
共に見し菜の花けふも見にきたり
空中に浮きあがるるや桃の苑
春晝や犬の寝息のきこえきて

☆

吉成美代子
東京

一人ゐてどこかで雪のドサと落つ
菜の花や今帰仁（なきじん）城壁百曲がり
ドアひらく梅が香のせる停留所
探梅に飽きたる頃の試食かな
梅香る餌待つすずめ並びゐる
今日も来るつがひの目白椿咲く
どことなく街濡れてゐて月朧



☆

吉弘恭子
東京

徐に一歩といかぬ時雨道
したたかな口のすべりや冬の鳥
殿をゆつくりあゆむ巴鴨
背より合図の指春二月
心地よき冬の日のアスファルト踏む
只管にアスファルトつつく寒雀
十重二十重鴉雀と春のこゑ

☆

赤座典子
東京

界隈の雪深き里となりにけり
夕刊の翌朝届く春の雪
連日の遅配の詫び状雪垂
篝火草繕ふものの見つかりぬ
花豆を丁寧に煮る雪籠
ジャンパーの快心の笑み麗けし
春の大雪繰返し見る金メダル

☆

井上石動
山梨

春の雪圧倒的に消えにけり
をとめらに明日香の風や青き踏む
すすり飲む水の甘さよ独活の山
打ち棄ての花瓶の梅の葉萌かな
朧夜やはぜて切れたる三の糸
春宵の片手痛めて知る総身
亀鳴いて歩行の月光仮面かな

二月の東京に雪が二度も降った。最近は「無理に外出はしないように」としきりに言われるので、最初の時は都知事選の投票に出かけただけであった。

二度目は四十五年ぶりという積雪。あらゆる予定が中止となり、ソチ五輪をテレビで見ながらの全くの雪籠りであった。

四十五年前の大雪の時は結婚二年目で高田馬場に住んでおり、面白がってスキーを担いで見回りに出かけた。

近くの女子学習院から早稲田大学文学部までのゆるい坂を何度も大喜びで往復した。純白なゲレンデとなった坂は誰も通らなかった。

春の大雪が大昔の出来事を突然思い出させてくれた。

甲斐国は、雪国となる

自然とは雄渾であり、かつ、過酷なもの……とは、聞き知ってはいたが。

まず二月八日（土曜日）、六〇㌢ほどの積雪。ビックリ。翌日曜は、日がな雪かき。

翌週十四日（金曜日）、バレンタインの贈り物の雪。なんと、一㍍以上。山梨県で過去記録を取って以来の積雪。中央高速道閉鎖、県下を横断している国道20号線閉鎖。国道各所で、雪に埋もれる車続出。公民館を解放して運転手を救出・保護。煽めば、また雪かき。半端ではない積雪量。おおげさに言えば、胸まである雪の海を掻きわけ掻きわけ……。

駐車場の車群は、雪にすっぽり。ちょっと粋な「かまくら」の整列。片道一時間かけて、娘のオムツを買ってきた若き父によると、スーパー・コンビニの陳列台は空っぽ……とのこと。果樹王国の山梨、葡萄も桃も被害甚大。かくて、二〇一四年は、山梨県にとって、忘れられない年となりけり。

でも、もうすぐ桃・李・桜が咲きます。

にこやかに

大日向幸江
埼玉

目白来て猫には利かぬ平常心
大雪に生木の裂けのとどまらず
バレンタイン同年の使ふスマートフォン
川上に小波立ちたる春の川
水揚げのガーベラ今朝もにこやかに
無人なる家の吐き出す余寒かな
北側の田に残雪の山となり

雪

木村茂登子
神奈川

冬薔薇時経て晴るる蟠り
鬼遣ひあとを清めの春の雪
雪や霏霏家並は人を拒みをり
雪深深巷の音を消してゆく
日本列島みな雪国となる二月
「ゴメンナサイ」が言へずに涙チャンチャンコ
何となくココア飲みたし春の雪

私は今年年女である。
町内会の薦めによって氏神日枝大神社の節分祭豆撒に参加した。
私の住む小田栄地区は、小田・田島・渡田といづれも田のつく町名の町々に囲まれている。
昔は一面田園であったとのことで海抜も0.4米と低い。
日枝大神社のご祭神は「大山咋神」とて地水の神田を守る神様とのことも頷ける。
当日は豆の入った升を持って社殿でお祓いを受け、玉串を捧げのち三組に分れ社務所の二階外廊下から小袋入りの豆と、子供達のためこれも小袋入り駄菓子を大量に撒いた。
年男年女の他、市長・国会・県会市議会の議員さんや、町々の長老も参集した賑やかな節分祭であった。
神社の社殿に昇るなど遠い昔の七五三以来のことと、祝詞を拝聴しながら感慨深かった。
豆撒は四時からだったので、足弱の私は暗くならないうちにと直会は乾杯だけで帰らせていただいた。
祝詞も呪詞も言霊。
道道そんなこと考えていたら、フト、季語は、とおもった。

☆

何食はん夫の口癖花八手
裸木を仰げば幽き昼の月
闘病の窓に一幅梅の花
還暦に母より届く春蜜柑
寒明けて5クール突入癌治療
点滴終へ夫と歩けば春告鳥
5クール終へ土手を歩けばつくしんぼ

斉藤　裕子
東京

病気になって気付かされた事、考え方を変えさせられた事がいろいろある。

その一つ。少し宗教めくが、今迄この身（肉体）は自分の物と思っていたが闘病生活をして行く中、自分はこの身を預って使わせて貰っていると思うようになった。というか思うことにした。

失った事ばかりに目を向け、何故こんな病気になったのだろう、どうしようもない体になってしまったと嘆いて許りいた時もあった。しかし、そう思うようにしたら、「今迄粗末に扱って御免ね。「手術に耐えてくれて有難う。」「また元気になって、こんな事もできるようにしてくれて有難う。」と思えるようになり、まだ残された自分のできる事に気持ちが向かうようになった。つい無理をし疲れ落ち込む。体に対してまた傲慢になりかける自分を反省する。愚かにもその繰り返しだが、起床時と就寝前に「今日も宜しく。」「明日も頑張ってね。」と、優しく我身を摩りながら、感謝の気持ちを込めて、ドレナージ（リンパマッサージ）を行う毎日である。

いやおひ

いやおひや私の中の縄文人
ざんばらの遠藤関やいやおふる
春あけぼのこれは夢だと思ひつつ
春空に在るけもの道ヘリコプター
起きてゐて歯ぎしりをする余寒かな
春兆す銀座其処此処ピンヒール
掛けすぎたヘアートニック春寒し

篠田　純子
港区

シナリオライターの山本むつみ氏の講演会を聞きに、日比谷図書館へ出向いた。テーマは「資料の一行からドラマを作る」というものだ。氏は朝のドラマ「ゲゲゲの女房」や、大河ドラマ「八重の桜」のシナリオライターだ。

良い本の選び方は参考文献、索引、年表の三つがあることで、また、装丁が美しい本は作者の思い入れが強く、良い本の場合が多いとのことだ。氏は家中本だらけとのことで、今は先ず図書館で借りて吟味してから購入しているそうだ。

「八重の桜」で山本八重の最初の夫の川崎尚之助の資料を探した折、函館の裁判記録の一行から尚之助は斗南藩士の前は会津藩士であったことを発見したという。また、会津藩主が京都守護職を「国元の大火ゆえ辞退したい」と言った記録の一行が、会津で大火があった裏付けとなったという。資料からドラマは作られていることを知った。

前月抄

原子爐を両手でつつむ雪女　佐藤喜孝

淡雪や喰はれた鳩のつばさ美し　篠田純子

寒燈や賽銭函をのみ照らし　定梶じょう

読初の日本国憲法声に出し　須賀敏子

島椿ひとのいまはの海の景　竹内弘子

除夜の鐘十ほど聴いて床に入る　田中藤穂

小正月一菜ふやす赤ワイン　長崎桂子

ふきなびきけむるがごとし枯芒　早崎泰江

思ひには分け入り出来ず海鼠かな　森　理和

片足を右足にのせ足袋鞐　吉弘恭子

冬夕焼車内にひびくオラトリオ　赤座典子

はみだして足九文半春炬燵　井上石動

堀炬燵練炭の香の甘きこと　大日向幸江

大寒や動くものなく空真青　木村茂登子

生きてをり子等と食積喰うてをり　斉藤裕子

三月作品より

木村茂登子・佐藤喜孝

草の根につまづく象を思ひをり　佐藤喜孝

象とライオン、昼間は象の方が力関係で優位であるが、夜となると視力の差でライオンが優位になる。と、ＮＨＫの「生きもの地球紀行」で知った。

夜、ライオンの気配を察して象の群は子象を中心に守りを固くして逃れようとする。その円陣の一角が何かの原因で崩れれば忽ちライオンにつけこまれてしまふ。毎日が弱肉強食の生存競争の動物の世界が繰り広げられる映像がいつの頃からか見るに耐えられなくなってしまった。

〝草の根につまづく〟といふ意味はいろいろ考えられる。

作者の想像の視野に幻といはれる「象の墓」が彷彿としているのであろうか。（茂登子）

淡雪や喰はれた鳩のつばさ美し　篠田純子

句の現場に遭遇した時の驚きは如何ばかりであったらうか。それは「喰はれた」と強い言葉遣ひに現れてゐる。散乱した羽毛ではなく翼とは驚きが増す。命の切れ端を「美し」といふ。実感であり鳩への鎮魂。（喜孝）

網金の餅のふくれっ面愛す　定梶じょう

網金といふ名詞に私なりに疑問を持ちました。金網でなければそのものの大きさとか、たまたま餅を焼くのに用いた通常の使用方法ではないものとすればどんな大きさで場所で、その下の火力は何か……。周りに何人か居たのか？

それにしてもふくれっ面といふ表現が面白い。

火鉢を囲んで炭のとろ火でゆっくりと焼いた昔のお餅も百面相でした。

打ち返し打ち返しじっくりと焼いたお餅をなつかしく思い出しました。（茂登子）

寒燈や賽銭函をのみ照らし　定梶じょう

神社の夜景。寒燈が照らせるものは賽銭箱のみ。あたりは闇の中、のやうな景が浮んできた。情景句とも読めるが、照らしてゐるのが賽銭箱のみといふ諧謔味を受け止めた。（喜孝）

読初の日本国憲法声に出し　須賀敏子

現憲法下で生活してきたわたしには、外圧があらうとさう安易に九条から逃げ出すことは出来ない。憲法を音読する作者。正月のキリッとした空気が家内に満ちてゐる。ただ目出度いだけではない作者の正月。背筋を正された。（喜孝）

除夜の鐘十ほど聴いて床に入る　田中藤穂

除夜の鐘の残り百弱は蒲団の中で聞く。これも極楽。「浮世の馬鹿は起きて働け」といふのは妻の祖母の口癖だったとか。田端では鐘の音が聞えるのだらう。わたしの住居環境では叶はぬことである。わたしは除夜の鐘をすべて聞いたことがない。子供の頃からこの時間は寝てしまってゐる。作者にとっては何気ない句内容であらうが、わたしには得難い環境の句である。（喜孝）

ふきなびきけむるがごとし枯芒　早崎泰江

枯芒はたしかにさう見えるやうに思へる。的確な見立て俳句の魅力。（喜孝）

冬夕焼車内にひびくオラトリオ　赤座典子

夕焼は四季に拘らず山野も街も海も一瞬ではあるが見事に荘厳化する。カーステレオからはオラトリオが流れてゐる。ヘンデルのハレルヤコーラスなど夕焼に叶ふやうだ。（喜孝）

片足を右足にのせ足袋鞋　吉弘恭子

女性の一姿態その仕草を見事に詠んだ句。中年以上の和服をお好む方には説明などいらない決まった一句である。

右足に片足と云った何気ないようで何気もある表現に恐れ入りました。

あとは何を云っても蛇足。

それにしても〝コハゼ〟の字が何故革扁なのでしょうか。（茂登子）

そこかしこ満つや梅の香城下町　井上石動

早春の梅香る城下町、それだけで旅心をそそられます。

白の縄張りの大小、禍福の結果は隅梢一つ残っていなくても城下町は日本中にあり、それぞれ歴史的雰囲気をもってをり、小京都などといふ呼名同様にあこがれの地でもあります。

私にとって小田原は縁の深い城下町で、梅は勿論、桜・藤・水仙・水蓮等四季の花々が楽しませてくれました。

お城近くの公衆トイレに「殿」「姫」となったのも城下町ならではの思い出です。（茂登子）

浅き夢いくつも見るや感冒の夜　大日向幸江

昔、親しい女医さんに感冒には薬よりも注射より温かくして美味しいものを食べて寝た方が良い。といはれ、お墨付を得た心強さで休暇をとりました。効果覿面、何となく安らかな気持で休めて快復しました。

感冒という大義名分を大いに利用して蒲団に甘ったれることも時には大事、それ程重い症状でなかったら、ウツラウツラ見た夢も決して深刻なものではなく、むしろのぞましいこと、これからやりたいこと等ではなかったでしょうか。（茂登子）

生きてをり子等と食積喰うてをり　斉藤裕子

〝生還〟なる語がある。戦地からの帰還兵・大手術から目が覚めた時などに使はれる。たかが野球ごときに使ふ言葉ではない。家族に囲まれて正月を祝ふ。食積を思ふ存分楽しんでゐる。「生きてをり」と再確認する作者と家族がゐる。（喜孝）

月刊 俳句界　2014年5月号　定価1000円(税込)

別冊 特別付録『俳句ダイアリー 夏』

《シリーズ 結社の未来を考える⑦》(最終回)
全国俳句結社主宰 300名大アンケート
特集 ～「結社の高齢化」「若者の結社離れ」など、結社の抱える問題点とその打開策

〈グラビア〉俳句界NOW　池内英夫
作品　斎藤夏風　綾野南志　宮本径考

特集 旧かなVS新かな
～私が旧かなで詠む理由、新かなで詠む理由
森村誠一（作家）　眉村卓（作家）
長嶋有（作家）　ねじめ正一（詩人）
中上哲夫（詩人）

おとなのエッセイ　綾戸智恵　小嵐九八郎　他
＊セレクション結社　「田鶴」水田むつみ
私の一冊　小川軽舟「鷹」

魅惑の俳人　佐藤鬼房　＊インタビュー　高野ムツオ

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　矢野顕子（作曲家、ミュージシャン）

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

わが敬愛する俳人たち

—百日草乙女の一身またたく間に　草田男—

阿部寒林

瀧　春一

山口誓子先生が『馬酔木』に居られたので当然のようにその門下生のぼくは『馬酔木』へ入った。まだ伊勢大杉谷時代であったので昭和二十二年頃の筈である。偶然誌上で添削募集をしていたので指名応募をしてみた。確か木津柳芽。瀧春一。他にもおられたと思うがその時は瀧先生を指定してみた。返送された添削句稿は三句でやや乱暴に見える字体で朱を入れられていたが細かいことは全く記憶にない。

春一主宰の『暖流』へ入会したのは二年後、東京へ戻ってからであった。『馬酔木』の傍系誌の中では最有力誌であった。当時の会員は千名とも二千名ともいわれていたが遅刊が毎度のことで有力同人などから批判をうけていた。

編集、発行は一手に江泉正作氏が受け持っていたが、随分資金的にも又事務的にも苦労されていたようであった。病弱ながら論客同人の高橋星河氏などは痛烈に印刷、用紙の質、遅刊などの批判の先鋒であった。その他有力同人としては田米間啓介、後に中谷五秋、中島大三郎、秋山珠樹、高島茂、亀田虎童子、藤田宏、後期には鈴木石夫、松林尚志の各氏女流では吉見姉妹、大島竜子、富田美和、小島良子他むしろ男子よりも実力者が多かった。

瀧先生は『馬酔木』同人としても活躍されていたことは勿論である。ぼくが瀧春一先生と初めてお会いしたのは昭和二十年代の後半だったかもしれない。飯能の天覧山方面への探梅吟行に参加した時だったと思う。その時写した先生の写真が当時の暖流の表紙裏を飾っているいる筈であるからすぐ分かる筈である。いづれ俳句文学館で見たいと思っている。

先生は三越に勤めておられただけあって人当りは申し分ない。誰でもひと目で親近感を覚えるほどであった。その後職を根岸衣裳という歌舞伎他の衣裳を調達する会社に移られたがここは吾が国でも著名な会社であった。偶々先生が酒席などで歌舞伎などの科白を乞はれると如何なる場面の科白でも即座に眞似ることが出来て驚いたものである。

『暖流』の慢性的な遅刊と経費節約の件でぼくが一年余編集発行を先生依頼のもとに行ったことがあった。

その時は表紙の色刷りなどは高価なので止めて暖流という二文字を表紙に半分近くの太字で先生に書いて貰った。先生の住居は西武線の中井駅の近くの坂の途中にあった。編集会議などの時は必ず関係同人は先生宅へ集まったが、顔ぶれは前記の同人諸姉たちであった。当時句集の順序でいえば『瓦礫』以前の頃かもしれない。その次が『深林』—『燭』へとつづく。

先生の数多くの句集の中で一番製本の貧弱

な句集が『瓦礫』である。大きさは掌大位で一頁三句掲載で一一五頁（後書含）、昭和二十七年十二月一日発行とある。因に定価は四百三拾円とある。春一俳句はこの句集から「無季容認」「十七音基準律」の主張実践を示すことになる。なお次の句には特に前書がある。

水原秋桜子先生を訪問現在の俳句観を述べて諒解をもとむ。

かなかなや師弟の道も恋に似る

馬酔木に復帰せる石田波郷氏よりの来信に応えて

「去来同心」ぼくは瓦礫を踏むたのしさ

当時このため退会者も続出した。が逆にこの句集に感動した人たちも居て『暖流』入会者も多かった。従って寄る人たちの句風は自由ということになった。

瀧先生との思い出は書き切れないほど多いが最後に二、三だけ記しておきたい。毎月の俳句会でどこをどうして獲得したのか今日でもわからないが句会場をその時は萬世橋の「鉄道博物館」の弁慶号の中で行ったことがあった。弁慶号の中はチーク、マホガニー材などを用いた客車で現在は重要文化財指定だと思う。もちろん博物館も埼玉へ移っていまはない。この豪華極まる客車内で句会を行ったのである。これを知る人は今は何人も居ないかも知れない。この帰途の時、瀧先生は新宿駅まではぼくと一緒なので同行した。「新宿で一寸面白い処があるから一緒に……」と下車。其処は西口からすぐ右手の狭い路次の左右に飲食店が並ぶ飲食街。当時のことであったからみなお粗末な造作であった。その一軒が『ボルガ』であった。宵の口だったのでまだ客は居ず愛想よく迎へて呉れたのは高島茂夫妻であった。常連の先生はすぐ紹介して呉れたがこれが高島御夫妻との初対面であった。後年『ボルガ』が小田急ハルク裏の

方へ移った時、折に触れて茂さんは「『天狼』の貴方が瀧さんのところに居られたので僕は暖流へ入ったのですよ」と言われたが今でも茂さんの方が入会は先だと思っている。

昭和六十三年、瀧先生八十八歳、傘寿の記念として沖積舎から「全句集」が発行された。箱入り天金の豪華本で限定四十八部のうち十八番を頂いた。定価は明記されていなかったが一万円位だったと思う。先生はこの「あとがき」の中で「全句集というものは、すでにこの世を去った人の生涯の句を集めたものだと思う。――」と述べておられるがこの後俳壇でも忘れかけられたほどの長期自宅療養者となった。この全句集の栞に執筆された人は次の通りである。

加藤楸邨・高屋窓秋・金子兜太・星野慎一・草間時彦・山本健吉。この六氏が採り上げた春一句の中から一句づつ記してみる。

楸邨―　目裏に浮かぶ波郷の懐手
窓秋―　をさな子はさびしさ知らぬ椎拾ふ
兜太―　木がくれの谷ふかき田を植ゑてゐる
慎一―　梅を見て人にかかはりなく帰る
時彦―　日向ぼこ心貧しく居りにけり
健吉―　何んの日かんの日いろいろの日や年の果

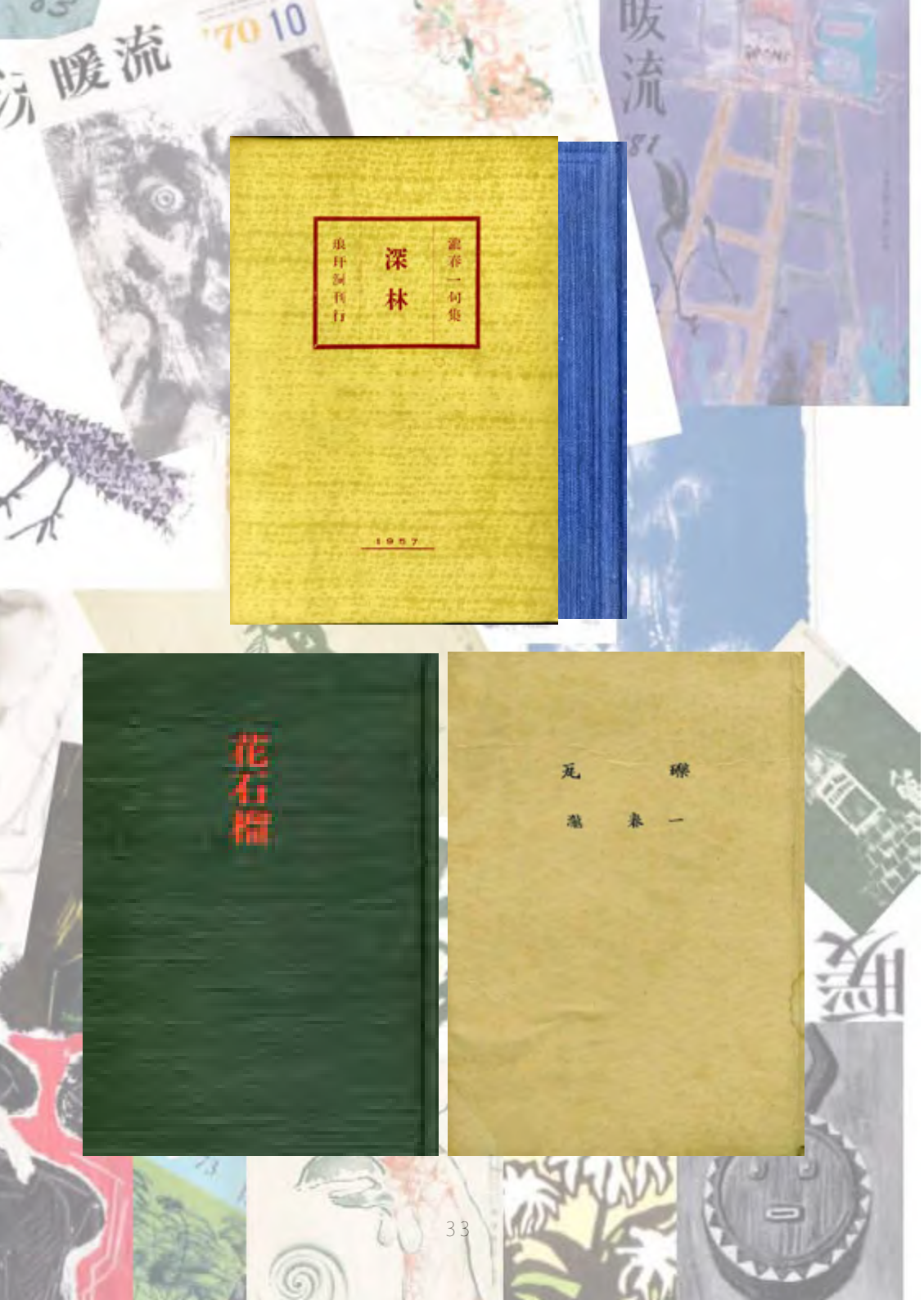
以上である。それから『天狼』で活躍された盟友八田木枯さんが春一先生と数回『暖流』句会で肝胆合い照らす仲であったことである。昭和五十年に入った頃、『暖流』句会が飯田橋の鮨屋の二階で夜分行った時があった。店主は勿論、暖流人であったから全てが行き届いていて句会のあとは飲食の座となった。瀧先生も木枯さんも大の酒好きであったからぼくが彼を先生に紹介した後は十年の知己の如くになったのには驚いた。酒の力であろうか。それに上戸は夜に強い。この句会は夜分なのでアクセスのよい人達が集ったようであった。暖流誌上には掲載されている筈だと思う。

先生が東一病院（東京第一病院ー元陸軍病院）に入退院を繰返されていたのは傘寿の数年前からであったが、ついに再起不能となり前記のように長期に亘っての自宅での療養者となったのであるが、この間、秋山珠樹氏が光陰集の代選者となり運営などを務めておられていた。しかし病悪化のため死去されたのでその後主要同人諸氏の努力で暖流発行を続行したのである。しかしついに先生死去と共に廃刊となったわけである。先生は生前、句集『花石榴』によって蛇笏賞の栄に浴された。このときは既に『馬酔木』へ復帰されていて住いも下落合から世田谷の砧へ移られていた。受賞以後の先生は逆に句作に悩んで居られた様子であった。あるいは密かに病魔が先生の頭を蝕んでいたのかも知れないと思っている。

いま思うと最後に先生と直接会った日は秋桜子書の軸の箱書を依頼に行った時だったと思う。会社の出入りの親しい業者で五本程持ってきて誰が箱書にふさわしいかと相談に来た。その時即座に私は瀧先生を推した。というわけで砧に赴いた。先生は一幅づつ懐かしそうに観ながら快く応諾してくれた。この中の一幅をぼくは所有している。

余生なほなすことあらむ冬苺　秋桜子

先生がこの軸をいちばん長く観られていたことを思い出す。先生が身罷られた時は杉並の堀之内の葬祭場で告別式が行われた。この日は朝からであったので暖流関係の人々にはどうかと思われたがアクセスのよい人達は参列しておられた。先生は横浜生れであるからいまは故郷の土に永遠の眠りにつかれている。いつ思い返しても本当にいい先生であった。



自詠自読

春の燈や高き声洩る博奕宿　石動

テレビなどまだない我が幼なき頃は、家族の冬の愉しみのひとつが「蜜柑刺し吊り上げゲーム」。剥いた蜜柑の房を山にして、針で刺しあう。うまく吊り上げると自分のものになる。末っ子の私は「ズル（ルール違反）」専門。なんとか蜜柑一房をせしめようと、知恵を駆使する。「あれ、またズルしたのけえ（したのかい）……」云々で諦められながらも盛り上がる。

もう一つが「花札歌留多」。カス札十枚、猪鹿蝶、赤短3枚、青短3枚、三（四・五）光、獲り札八枚かっきりで「はっちょうぶく（お流れ・遣り直し）」などなど、これは家族全員が必死こいた。それはそれは「高き声洩る」博奕宿でもあった。家族全員での団欒があった時代でありき。

掲句に篠田純子さんが『宿をマークしている私服警官も見えるよう』と鑑賞してくださった。ドラマ的な楽しい鑑賞で嬉しかった。

みどり兒を膝にあづかり日向ぼこ　茂登子

姪の生んだ生後間もない嬰児を縁側の椅子に腰掛けて抱くといふより膝にのせてもらった。まだ重心の定まらぬ赤ん坊の体は、皮袋に液体を入れた状態の様に誠に危うさを孕んだ物体といった感触であった。

以前混み合った長距離列車の中で三四歳の子供さんを膝にあずかったことがあった。母親が傍にいる安心感か子供は始めて会った私に心許して素直に膝にのっていたがやがて眠ってしまった。眠ってしまった子供は重心を分散できないのでその重さは抱

えている私の腕に徐々にずしりとかかってきた。親子が下車したあと私の腕は完全に痺れて感覚を失っていた。

そんなことを思い出しながら日当たりの良い縁側でのんびりと過し滅多にない時間、かすかに感じる乳の匂ひもなにかなつかしく至福の時であった。

綿虫のふれたる水の面さざなみす　じょう

昔むかしのことです。

〈冬日のきりん高きところで反芻し〉の句を当時加わっていた会に投句。入点数はわからぬが、メモ帳には「いささか当たりまえ」、「季語がうごく」、「どうしてキリンなのか分からぬ」等と評されたことが書かれてあるのです。

どうしてキリンなのか、と言われても見たのがキリンだからであり、ですから高いところで反芻しているわけで、「いささか当たりまえ」と評されたことの方がずっと納得がいく。そして掲句これも当たりまえの句です。小さな綿虫が水な面に落ちて、その小景を「さざなみす」と誇張した。「ふれたる」も、落ちたわけですから詩的うそなのですが、写生一本槍の方々にはこういう「うそ」が承知できないらしい。

詩的表現とは誇張のことだ、と一度発言したら、俳句は詩ではない、と一蹴された。

帰郷して句作りを再開したばかりのことで、私以外は『ホトトギス』あるいはその衛星誌の投句者達。先輩のとほるさんに嘆いたら、「人もいろいろ、句もいろいろだ。もっともっとこれからいろんな目にあうと思うよ」と仰有った。

まさにその通りになっているわけだが。

白を着てあかごあらはるはるかより　喜孝

娘は近所の産院で生れた。この産院いまは跡形も

なくなってゐる。個人病院なので母親が分娩室から戻るまで、しばらくわたしとあかんぼの二人きりで病室にゐた。わたしの母親にどこか似てゐるなと思ひつつ母親が戻るのを待ってゐた。

退院の日は五月の日射しの強い日であった。わたしが抱いて三人で青梅街道を渡り徒歩で帰宅した。日射しが赤ん坊の顔に当るので顔を庇いながら歩いた。子供の顔を見たわたしの第一声が「娘の結婚式には出ない」であった。が、結婚式にミャンマーまでいそいそと出掛けたわたしがゐた。その娘が世に云ふ高齢出産で娘を得た。猿のやうにいつもいつも胸に抱へて結構重くなるまで何処へでも出かけてゐた。その姿を見てわたしも大きな仕事が完了した満足感を味はった。ある年の妻の誕生日にiPod shuffleを選んだ。裏にメッセージを書き込めるサービスがあったので

壹歳半の滋子を輕視す冬の猫

大福のごとし行水了へたる子

と入れてもらった。娘と息子がモデルである。

あをキーワード俳句辞典（きね—きは）

杵

古びけり杵も木臼も梅雨深く　定梶じょう

記念

勝鬨橋は戦捷記念都鳥　芝　尚子
校庭の記念樹しかと運動会　芝宮須磨子
寒見舞記念切手を貼つて出す　栢森　定男
終戦記念日スイーツとなるさつま藷　木村茂登子
小春日や記念切手の列に居る　森山のりこ
指鉄砲にしとくか憲法記念の日　吉弘　恭子
庭を掃く国旗掲げる憲法記念日　長崎　桂子
記念樹にVサインせり卒業生　大日向幸江
凍港に記念館であり摩周丸　赤座　典子

昨日

いてふ並木昨日より今日みどりの日　木村茂登子
昨日とは違ふ見方で白芙蓉　芝宮須磨子
秋まきの昨日の土の琥珀色　吉成美代子
家計簿に昨日を記す花八手　長崎　桂子
ミモザ咲く昨日は今日を知らざりし　須賀　敏子
踏み崩せば昨日より長し霜柱　斉藤　裕子
桜散るきのふのゴミの山の上　東　亜　未
きのふより高し九月の富士の山　佐藤　喜孝
きのふより水のつめたき金魚鉢　竹内　弘子
うすらひやきのふをとほき日とおもふ　田中　藤穂
柿を剥くきのふはおけさけふ次郎　森　理和

気の毒

気の毒な真紀子まきこと梅ひらく　堀内　一郎

木登

春の風木登り誘ふ樟の枝　森　理和

木肌

春秋の風迷彩色の木肌かな　鈴木多枝子
八重櫻木肌うるはし色見せて　吉弘　恭子

黄八丈

木の芽雨島の娘の黄八丈　田中　藤穂
半纏は祖母の形見の黄八丈　鎌倉喜久恵

揮発

肌より木の揮発せり夜の秋　篠田　純子

寒の入　長崎桂子

はや五日急かず自転車乗る誓
老集ひ自立の話ごまめ噛む
寒の入地区の会所のトレーニング
ストーブの横が大好きストレッチ
マフラーや介護予防と言ふ体操
啾啾と庭の片隅寒の闇

春隣すこやか願ひ歌ふ会
合唱の高音低音四温待つ
思ひ切り厨事して置炬燵
大寒やめげず轟くブルドーザ
風避けて立話する野水仙
冬萌にほのかな紅の心意気

あとがき

このごろ聞かないがＮＨＫラジオの「ひるのいこい」の開始音楽が流れると条件反射のやうに眠くなった思ひがある。番組の中でローカルニュースが流れてまったりした時間であった。先日いただいたメールを断りもせず横流しする。

堅香子通信

歩いて3分の「裏山」に、誰も知らない、私だけが知ってゐる「カタクリ」の地がある。早朝起きると「小雨」。泣く泣く訪問を断念のこと数日。本日、「もう待てん…」と、絹雨の中、決行。現場は、今年も、ざっと百株あたりが元気に元気に。

されど、花が…無い！　無い！

大雪の影響？　探す、探す、探す…。

して、一輪発見、二輪発見…。結局、三輪だけが、きれいに咲いていてくれた。

時期尚早ならん…と、納得させて、終了。

数日後、再訪予定。

ひとくちメモ

堅香子は、しぼんだ状況から全開まで、ほんの数分です。

チラッ、チラッ、チラッ、チラッ、と

肉眼で判断できる早さで、開いていきます。

「石ばしる…」の皇子もひょっとしたら俺と同じ様に見てゐたのかしらん…と、己を彼になぞらへてもみたり…。

大月支局員　石動記

手抜きの後書であった（喜孝）

二〇一四年四月号

発行日　四月五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

郵便振替　会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。